

京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科
フィールドワーク・インターンシッププログラム 2011 年度 派遣報告書

報告者氏名

佐野航平

2010 年度 (入学・編入)

<p>1.研究課題： 商品作物栽培によるラオス北部シン郡盆地の農業の変化</p>
<p>2.派遣期間： 平成 22 年 10 月 18 日 ～ 23 年 3 月 1 日 (136 日間)</p>
<p>3.今回の派遣により、申請時に自身の目的としてあげた点について得られた知見を述べてください 申請時の目的は新作物への技術的対応、問題克服方法を明らかにすることであった。調査地のラオス北部シン郡盆地のアカにとっての新作物はサトウキビとパラゴムノキであった。 パラゴムノキは焼畑に植栽していた。村人二人が 2005 年に苗を購入し植栽した。最初は苗がシカに食べられたが、2007 年頃から皆植え始め近辺の森がパラゴムノキ園となったためシカの食害は現在起きていない。接ぎ木苗の作成技術は中国に居住するアカが説明したが、パラゴムノキの管理方法は誰の指導もなかった。安価な苗が多く作られていたことと、パラゴムノキの強健性が導入に当たって利点となっていた。 サトウキビは 2006 年に栽培が開始された。中国雲南省にある製糖工場で働いている村人の話がきっかけとなった。もともと低地に土地を保有していた世帯及び、土地を購入した 5 世帯が開始した。サトウキビ栽培による現金収入を知った他の村人は徐々に購入もしくは賃借により土地を入手しサトウキビを栽培するようになった。資材は製糖工場から前貸しされ、また栽培方法の指導もあった。収穫時の労働交換の方法は以前からサトウキビを栽培していたアカの他村の方法を導入した。</p>
<p>4. 自身の今後の海外への渡航や留学に向けた課題や展望について 今回の現地調査では現在の土地利用のみの調査で終わってしまい、過去の土地利用を十分に復元することが出来なかった。過去の焼畑の位置及び規模を次回調査で明らかにしたい。 次に調査期間が農閑期であったため耕作の様子、イネの生育状況を直接観察することが出来なかった。村人は様々な地形を農地として利用しており、農地の標高も 700～1300m まで幅広く分布しているため農地の違いによる農法やコメの生育状況の差があると考えている。投入資材量・労働時間や農耕技術を実測・観察し、各農地の収量を計算するためにも農繁期を通じて再度滞在し現地調査を行わなければならない。 最後にパラゴムノキの収穫があと 2 年ほどで始まり、生ゴムの販売開始による生活への影響を引き続き同じ村で調査を行うことにより明らかにしたい。</p>
<p>5. 本プログラムに関して意見をお聞かせください。また、今後どのような留学プログラムがあれば参加したいですか？ 農業を始めとする自然を対象に調査を行う場合、季節による変化が大きく、必然的に長期の滞在もしくは頻繁な渡航による調査を行わなければ全容を明らかにすることが出来ない。そのため本プログラムの最長 3 ヶ月という支援期間が短く感じられた。より長期の留学プログラムがあれば参加したい。</p>